

テーマ：「シャッター街をこじ開ける！

～ 怪獣酒場やライブハウスで市場に元気を取り戻そう～」

稲村 ではさっそく、本日お招きしたゲストの方をご紹介します。「怪獣」といえばこの方。協同組合三和市場の森谷寿さんです。こんにちは。

森谷 こんにちは。

稲村 いつも大変お世話になっています。

森谷 こちらこそ、いつもありがとうございます。

稲村 さっそくなんですが、今日は怪獣の話もたっぷり聞きたいんですけども、まず、この森谷さん率いる、と言いますか、いらっしゃるこの「三和市場」について、説明をお願いしたいと思います。

森谷 はい。「三和市場」は、阪神尼崎駅と出屋敷駅の間にある商店街のなかの一画にあるんですけども、戦後、物の無い時代に、我々の父親の代の時に立ち上げて、今に至るといふ……。

稲村 いわゆる「闇市」の時代から…。

森谷 はい。で、その時から、万博の前の年に建替えて、今に至る、という感じなんです。

稲村 そうなんですか。昔は大きな通りの「三和商店街」、「中央商店街」ももちろんでしょうけれども、「三和に行ったら何でもそろふ」と言われていたり、あと、やっぱりすごいと聞いたのは、大晦日。もうほんと身動きとれないぐらいの人出だったというのは、よくベテランの方から……。

森谷 うちも市場の中に2軒店があるんですけども、もう1軒の店に品物を持って行くのに、市場のなか通って行くよりも、裏の商店街出てまわって行く方が早く行ける、という感じだったんです……。

稲村 なるほど。ただ、そういった三和市場も、時代の変化のなかで、今はずいぶんと様相が変わっている、ということなんですよ。

ちなみに、ラジオをお聴きの方にご紹介したいと思うんですけども、森谷さん、そもそもの本業は何屋さんですか？

森谷 肉屋さんですよ。

稲村 お肉屋さんなんですよ。

森谷 はい。色々そっちの方でも、町興しとか店興しみみたいなことで、「尼崎ベーコン」とか、色んなこと、取組みをさせてもらっているんですけどね。

稲村 そうなんですよ。色々な市内のイベントで「尼バーガー」というのを、森谷さんの所で。

森谷 いつも並んで購入していただいて、本当にもうありがたい思いでいっぱいです。ありがとうございます。

稲村 もう大人気だから！ もともとあのベーコンは、学生さん達と一緒に開発したんですよ。

「尼崎の名物を作ろう」と言ってね。

森谷 はい。関西学院大学の学生らが市場の中に入って、各店で「1店1品運動」というので、それぞれの店で、何か面白い特色のある物を作りましょうと。うちはベーコンだったんですよ。

稲村 そうですね。で、そのベーコンと、尼崎産の工場野菜や、色々な尼崎産の物で、この「バーガー」を作ってもらって。これはもう、イベントの風物詩というかね、無くてはならない存在なんですけれども……。

森谷 「尼崎を凝縮した物を作ろう」というので、そういうふうにやらしてもらっています。

稲村 ほんとですよ。ただ、やっぱりこの三和市场全体で見ると、もう店舗数かなり少なくなっ
て、空きがたくさん出ているということなんですよ。

森谷 そうですね。一時期、最盛期は54店舗あったんですけども、今は12店舗。本来は9店舗
なんですけれども、色んな取組みで3店増えていますので、12店舗になっているんです。

稲村 今、そういう新しい取組みも結果につながり始めたというそのあたりを、ぜひ……。

森谷 怪獣なんですけどね、それも。

稲村 そこをじゃあ続いて、伺っていきたいと思うんですけども。そもそもやっぱりこの怪獣は、
「シャッター街を解決していこう」というか、空き店舗解消に向けた取組みということで始ま
ったんですか？

森谷 まずは、空き店舗の1軒をイベントスペースというか、何か開けるところから始めようとい
うので……。

稲村 時には「バー」みたいに、みんなで集まって飲んだり……。

森谷 そうです。そういうことです。

稲村 何かイベントごとをされていましたよね。

森谷 月イチでイベントして飲んだり、食べたり。とにかく、みんなで集える場所にしようと思
ったんですけども、たまたま僕の番がきて、じゃあ何でしょう？ といった時に、好きなもの
が「怪獣」だったので、じゃあ「怪獣」を使って酒場をしようかとやったら、大ヒットしたも
んですから……、

稲村 継続事業になったと。

森谷 そうですね。で、そのコンテンツを使って、「怪獣」だけではなくて「昭和」というものを
テーマに、何かやっていこうっていうので、今やってます。

稲村 なるほど。私ももちろん何度か足を運んで、寄せてもらってるんですけど、独特の雰囲気
なわけなんですよ、やっぱり。

森谷 去年も「三和市场まつり」には来て頂いて、えらい迷惑かけたかもしれませんがね。

稲村 いやいや、とんでもないです。でもなんか、昔ながらのちょっと懐かしい感じとか、「秘密
の基地」っぽい、子供時代の気持ちを思い出すような、くすぐられる空間になっていますもん
ね。

森谷 今、日本全国どこ行ってもおんなじような駅前で、同じような商店街の店並みというのがある
んですけども、何かそうではなくて、「取り残された感」みたいなものを残して、そこを逆
手にとって、何かできないかなって思って、やっています。

稲村 ほんとほんと。だからそれを逆に魅力に位置づけて、そういう雰囲気をみんなで楽しむ企画
として、多分これが当たったんでしょうね。

そうすると、先ほどの「一番お店が減った時に比べると、新しくお店が出てきた」というのは、
そういった森谷さん達の取組みから、新しくお店が増えたっていうことなんですか？

森谷 そうですね。実は2年ほど前に「尼崎横丁」というイベントも、月イチで夜やっていたんですけども、一昨年の貴布禰神社のお祭りの時に、そういうイベントをしてる時に、色々聞きつけてくれた若い子らが、大拳して来てくれて、「面白いな」、「ここで僕らもなんかできないかな」と言ったんですけども、補助メニューがありそうだったというので……、

稲村 はい。「チャレンジショップ事業」というやつですね。

森谷 そうなんですよ。で、それをじゃあ活用して、なんとかできないかなというので、彼ら、ひと月市場に入り込んで、チャレンジショップのための準備というか、10年ぐらいほったらかしにしている店もありますので、その中に入り込んで、プロの人には、電気の線を見てもらったり、水道、下水・排水を見てもらったりするんですけども、あと、使いやすいようには、本人らが入って、やってくれてるんです。

稲村 この「チャレンジショップ事業」、言ってみたら「試しに新しいお店をやってみないか」というこの事業は、まだ今も続いているんですか？

森谷 はい、やっています。

稲村 そうなんです。じゃ「我こそは」という方は、どんどんあとに続いてもらいたいということですよ。

森谷 そうですね、はい。

稲村 これは、当初は家賃を無料に、一定期間後は、また家賃を半額に、徐々にうまく離陸していきけるように後押しするという制度だそうで。ぜひ皆さん、お問い合わせもいただきたいと思うんですけども。実際に、じゃあこの先輩格として、店を開かれたのはどんなお店か、ちょっとご紹介いただけますか？

森谷 はい。1軒、怪獣ショップ「たんちゃん」という、「怪獣」がテーマの店が、もう1軒「KHカンパニー」という所も、2月から入ってくれているんですけども、そこも「怪獣」…。

稲村 じゃ今のところ、この「怪獣つながり」で新しい店が増えているという……。

森谷 2軒と、あと、若い子らがライブハウスと、カフェバーを。今までの市場には無い、「まるっきり新しい感覚のもの」というんですかね。が、入り込んできて。

稲村 面白いですね。実はこの「怪獣市場」、そうやって色んな展開を見せているんですけども、また色々新しい企画も考えられているそうで。大きいところではなんと、自主映画を作製しようという。教えてください。

森谷 稲村さんの「イナゴン」に触発されて……、

稲村 私、学生時代「イナゴン」というあだ名でして。なんかもうとにかく、この「ゴン」という感じだったというんでね、後輩達に「イナゴン」て呼ばれて。それで、たまたま誕生日のプレゼントだったかなあ。怪獣のぬいぐるみをもった時点で、もう「イナゴン」=「怪獣」というのが定着しましてね。

森谷 僕らも、「そういうのもあって」というのではないんですけども、世の中にあふれているものには、僕ら、あんまり馴染まないんですけども、「流行」とは違うところでやっていこうと思っていますので、ゆるキャラではなくて、ガチで怖い怪獣をもってきて、その「怪獣」でちょっと「市場興し」みたいなことできないかなって。

稲村 面白いですよ。

森谷 ほんとに人を怖がらせる怪獣というのを作りたかったんですよ。

稲村 ちょっと今日は時間が足りないくらいで、もっとお話を聞きたいくらいなんですけれども、最後に、怪獣の取組み。今、色んな方々が、三和市場に集うようになってきたということだと

思うんですけれども、今後の三和市場全体の展望といたしますか、展開について、ちょっとお話を伺えますか？

森谷 はい。三和市场っていうのは、「うなぎの寝床」みたいに長い所ですので、

稲村 そうですね。

森谷 間に道が2つ通っていますので、まず1つのブロックを、全部店を開ける。

稲村 いきなり全部じゃなくてね。

森谷 はい。そうすると、いきなりこう開けていくと、手付かずの所ができて、緩いものになってしまうので、1つの棟をかつちりと、やりたいことでまとめて、そこが完了したら次の棟に行くというようにやっていきたいんです。

稲村 いいと思います。で、またね、「怪獣のエリア」、そしてまた次はね、違うエリア……、

森谷 音楽であったり……、

稲村 「音楽のエリア」とかね。

森谷 なんかそういうふうにして、俗に言われる「サブカルチャー」というものが揃うよ、という町並みにしたいと思うんですよ。

稲村 そうですね。で、またね、「自分もちょっとライブできるちっちゃいハコ、あったらいいのに」っていうようなね。

森谷 あるんですよ。今ね。

稲村 そういう若い人達もいっぱいいると思います。私、すごく印象的なのは、昔、商店街というところとやっぱり、物や食べ物売っている、お店の集まりっていう印象が強かったんですけども、駅前前の便利な所が多いですね。こういった所は、そういった所からもっと自由になって、人が集まる場所、そういう新しいまちづくり、機能を担う場所として生まれ変わっていくというのが……。

森谷 そうですね。まあ我々、駅からちょっと離れていますので、独特なことをすると、ここまで歩いてきてもらえるかと……。

稲村 そういうことですね。

森谷 今やっているイベントも、地元の人よりもむしろ、遠くから来てくれる人の方が多いので、だからそういうふうな人達に来てもらえるようなまちづくりをやりたいな。それと今、我々がしているのは、残っている店の、例えば理事長の所の漬物屋さんであっても、花屋さんでも、こういう怪獣の取組みをしても、「アイツら勝手にやっているんだ」というのではなくて、お客さんが来ている時には豚汁を作ってくれたり、コーヒーを出してくれて、休憩して遊んでもらえるようにと、イベントに係わってもらえるというところが、ありがたいところなんですよ。

稲村 なるほど。

森谷 今、理事長含め、「僕らもできることは協力するで」と言って、ワケわからんなりに一緒に動いてくれているところが、やっぱりついてるところだと思うんですよ。

稲村 なるほど。これからが楽しみです。今後もまた、色々連携させていただきながら、まちの活性化に向けてがんばっていきたいと思います。今日は本当に、どうもありがとうございました！

森谷 こちらこそ、どうも本当にありがとうございました！

稲村 それでは、今日はこの辺でお別れです。次回の放送もお楽しみに。

以上